第38回全日本大学男子選手権大会

平成15年8月29日(金)～31日(日)山口県宇部市／宇部市野球場他

日ソ協記録委員 **服部　辰夫**

日本体育大(東京) 4連覇！

標記大会は、山口県宇部市で開催された。宇部市での大学選手権の開催は実に5度目。ここ宇部を舞台に数々のドラマが生まれてきた。

大会前日に行われた開会式は、突然の夕立に見舞われるというハプニングはあったが、全国各地の厳しい予選を勝ち抜いた男子32チーム・女子24チームが一堂に会して盛大に行われ、大会の幕が切って落とされた。

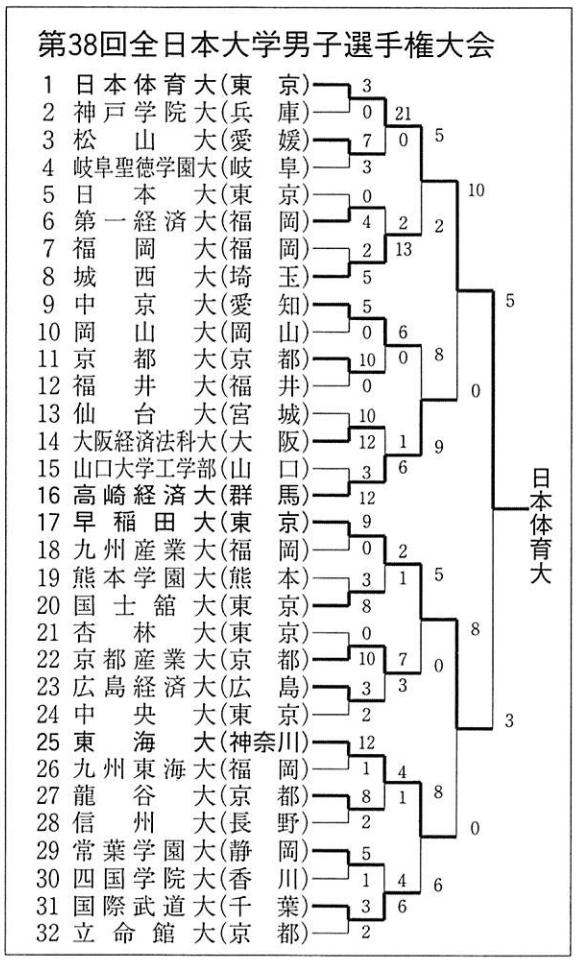
大会初日は1回戦16試合が行われ、1試合が日没コールドとなってしまったが、有力チームは順当に勝ち進んだ。

大会2日目、この日も僅差の試合は少なく、長打が乱れ飛ぶ迫力のある試合が続いた。この日は試合途中から天候が崩れはじめ、準々決勝の3試合が降雨コールド。すでに試合が成立していたため、運営上は問題なかったが、特に城西大（埼玉）対日本体育大（東京）の一戦は、2―5と3点をリードされた城西が、7回に無死満塁の絶好機を迎えたところで中断。44分の中断の後、降雨コールドが決定したが、何とも惜しまれる結末であった。

ベスト4には、4年連続26度目の優勝を狙う日本体育大。

準々決勝で中京大（愛知）との乱打戦を制し、第7回大会（昭和47年）以来、久々に準決勝進出を果たした高崎経済大（群馬）。

2回戦の国士舘大（東京）戦こそ2―1と苦戦したものの、それ以外は大差で勝ち進み、悲願の初優勝に燃える



早稲田大（東京）。

好調な打線の活躍で準々決勝までの3試合で24得点を叩き出し、打ち勝ってきた東海大（神奈川）。

以上の4チームが準決勝に駒を進めた。

○準決勝

日本体育大　4 4 2 0 0 ―10
高崎経済大　0 0 0 0 0 ―0

※大会規定により、5回得点差コールドゲーム

（日）○森―井上
（高）●高橋・佐土原―降矢
▽本勝呂②（日）
三杉山（日）加藤（高）
〔審〕P篠原 1川口 2後河内 3久保田
〔記〕関

日体は初回、2本の安打で一死一・三塁の先制機をつかむと、4番・勝呂が左越3点本塁打。さらに相手守備の乱れもあり、1点を追加。この回大量4点を先制すると、2回にも3番・坂井のタイムリー、4番・勝呂の2打席連続本塁打などで4点を加え、続く3回にも2点を追加。序盤で早くも勝負を決めた。

守っては、先発・森が大量点に守られ、余裕の投球。被安打2・奪三振9の力投で5回を完封。コールド勝ちで決勝進出を決めた。

○準決勝

早稲田大　3 1 0 0 0 0 4 ―8
東海大　0 0 0 0 0 0 0 ―0

（早）○石橋―佐川
（東）●大黒―塚越
▽本山内（早）三根ケ山（早）
三山内、新井（早）
〔審〕P豊海 1萩原 2山根 3岡村
〔記〕窪井

早稲田は初回、2つの四球で二死一・二塁とし、5番・根ケ山の三塁打、6番・山内の二塁打で3点を先制した。続く2回には1番・新井、2番・構の長短打で1点を追加。7回には4番・石橋のタイムリーと6番・山内の3点本塁打でダメ押しの4点を加え、効果的な長打攻勢で東海を圧倒した。

一方、東海は早稲田・石橋の前に打線が沈黙。散発3安打、12三振を奪われては打つ手がなかった。

◎決　勝

早稲田大　0 0 0 3 0 0 0 ―3
日本体育大　2 0 1 0 2 0 X ―5

（早）●中島―佐川
（日）○山尾―小野
▽本小野、勝呂（日）
三山内（早）
〔審〕P吉井 1丸尾 2沖田 3久保
〔記〕大島

手の内を知り尽くした在京チーム同士の対決は、日体が鮮やかな先制攻撃で先手を取った。

日体は初回、二死から3番・坂井が四球を選び、4番・小野が先制の左越2点本塁打。3回には四球、内野安打、バント安打で無死満塁とし、3番・坂井の遊ゴロが失策を誘い、1点を追加。試合を有利に進めた。

一方、早稲田は4回、連続四球で一死一・二塁の反撃機をつかみ、6番・山内が左中間を破る適時二塁打を放ってまず1点。なおも二・三塁と攻め立て、二死後、8番・中島の左前安打で二者を迎え入れ、一気に同点に追いついた。

3―3の同点で迎えた5回、日体は二死一塁から5番・勝呂が値千金の右越本塁打。再び早稲田を突き放し、2点を勝ち越した。

このリードをエース・山尾が最後まで守り切り、4年連続26度目の栄冠を手中にした。

惜しくも敗れた早稲田も決勝戦にふさわしい死闘を演じた

大会の開催に寄せて

山口県協会広報委員長　**近藤　節次**

「緑と花と彫刻のまち」宇部市で今大会が開催されるのは第16回、第22回、第28回、第31回に続き、今年の第38回で5度目となる。同一大会の同一都市での開催回数としては全国的にも稀なケースである。

これは宇部市の求める都市像の施策の一つとして、「スポーツの振興」を重要課題に挙げ、積極的に取り組んでいるからである。他地域でも、県政、市政の活性化のため、ソフトボールのみならず他競技の大会を積極的に誘致・開催していただきたいと思う。

さて、大会の方であるが、監督・主将会議での自己紹介に活発さが足りず、自チームの特徴、決意等を含めたPRも聞き取り難く、もっと若々しく堂々と自己紹介を行ってほしかった。

しかし、開会式では一転、大学生らしく若さ溢れ、威風堂々とした入場行進を行い、監督・主将会議で感じた不満や不安を一掃してくれた。

試合内容については、大学ソフトボールの最高峰の大会らしく、失敗を恐れない積極果敢なプレイが随所に見られた。これも今の自分に満足することなく、自らを鍛え、向上しようとする成長過程の意識の表れだと感じられた。

現在、日ソ協では「底辺の拡大」を課題として、様々な方策に取り組んでいるが、効果の方は今ひとつというのが正直なところである。

そういう状況下で、ここに集う大学生の選手たちが、競技者として日本のソフトボール界をリードしていくことはもちろんのこと、自らが日々の練習や試合で体得した貴重な経験を後輩たちに連綿と伝え、育成する指導者的役割を担ってほしいと切に願っている。